

涅槃の諸相と初期仏教経典
abhinibbuta 複合語と parinibbuta を含む経典について

富田真理子 (大阪大学)

発表者は過去に初期仏教経典『スッタニパータ』(Sn) 中の古層に位置づけられる「ヴァンギーサ経」(Vaṅgīsasutta) を原語に忠実に精読することで、涅槃関連語彙の語義につき若干の考察を行った(富田真理子 [2008] 『スッタニパータ』「ヴァンギーサ経」における涅槃について『待兼山論叢』第 42 号哲学編, pp. 49 – 66.)。その中で、発表者が調べ得た本経の諸現代語訳においては、本経韻文中の abhinibbutatta と parinibbuta を別の事象と理解し、訳出を変えた意図が窺われるものが大半であった。本経に関して発表者は、同じ涅槃の状態を示すが別時点を意味した事象として捉え、abhinibbutatta を生前に得た涅槃として「自ら涅槃した(状態にあった)」、parinibbuta を命終時及び命終後を示す「般涅槃した」と和訳した。

先行研究において、接頭辞 pari- の有無にかかわらず parinibbuta と nibbuta の同義での使用を認めつつ、さらに「般涅槃」が阿羅漢・解脱者の死を表すとする多くの先行研究が見いだせる中、接頭辞 abhi- を付した abhinibbuta に関しては、parinibbuta とほぼ同義であるとの説が散見されるのみのものである。

本発表においては、これまで深く掘り下げられることがなかった abhinibbuta に注目し、パーリ聖典中に abhinibbutatta あるいは diṭṭhadhammābhinibbuta という複合語形のみで現れる abhinibbuta 複合語全用例と、abhinibbutatta の考察に有用である nibbānam attano の全用例、さらに abhinibbuta 複合語を含む経典に parinibbuta が使われている場合を中心に、限定的ながら parinibbuta についても検討し、その上で、Sn ヴァンギーサ経の考察で知り得た結果が、他経に広くあてはまるのかどうか、それとも再考すべきものなのか、また従来の最古層、古層等の経典の成立時期の分類に照らし合わせ、時代の変遷とともに、用法に変化や発展・受容が見られるのかどうかにつき考察した上で、Sn ヴァンギーサ経の解釈及び成立の背景につき一考を試みる。

以下の用例を含む経典につき検討する。

abhinibbuta 複合語

最古層 Sn 783, Sn 1087, Sn 1095

古層 (上記以外の韻文) Sn 343=Th 1263, Sn 456, Sn 469, MN III no. 130 偈文, AN 3. 35 (I p. 142) 偈文, AN 6. 23 (III p. 311) 偈文, Ud p. 29 偈文, Ja II no. 277, Ja III no. 303

散文 なし

nibbānam attano の用例

最古層 Sn 940, Sn 1061, Sn 1062

古層 Ud p. 28 偈文

parinibbuta の用例 (Sn に限定し、以下の一部か全部を検討予定)

最古層 なし

古層 Sn 346, Sn 359, Sn 370, Sn 467, Sn 735, Sn 737, Sn 739, Sn 758

散文 Sn II – 12 p. 59 – 60 (ヴァンギーサ経 5 例)

キーワード: ヴァンギーサ経、abhinibbuta 複合語、parinibbuta